

アサギマダラ:海渡るチョウ、相模原で休憩 福島で放す →48日間で250キロ移動 /神奈川

毎日新聞 2012年11月17日 地方版

海を渡り国境を越えて旅をするチョウとして知られるアサギマダラの移動ルート調査のため、福島県で日付などをマーキングし放した雄の個体が、約250キロ離れた相模原市緑区川尻で捕獲されていたことが分かった。1頭ずつ渡るため人目につきにくい上、数少ないマーキングされた個体が旅の途中で見つかるのは珍しいという。

チョウ類愛好家の田口仁志（まさし）さん（28）＝同市中央区南橋本＝が10月13日、川尻地区を流れる境川支流の穴川の谷戸（やと）で捕獲した。左前後翅（し）の裏面に「デコ ちえこ131 8/26 む」と記載されていた。アサギマダラ研究の第一人者として知られる内科医で群馬パース大学大学院の栗田昌裕（まさひろ）教授（61）を通じて追跡調査したところ、石川県宝達志水（ほうだつしみず）町の堀千恵子さん（57）がマーキングしたものと分かった。

夫の孝治さん（59）とともにチョウ類愛好家の堀さんは8月26日、アサギマダラが集まる福島県北塩原村のグランデコスキー場で開かれた移動経路を調べる放蝶（ほうちょう）会に夫婦で参加。ヨツバヒヨドリの花の蜜を吸っているアサギマダラを捕まえ、捕獲場所や131頭目の放蝶を示す数字などをフェルトペンでマーキングしてから放った。約250キロの距離を48日間で南南西方向に移動したことになる。

栗田さんによると、アサギマダラはもともと亜熱帯、熱帯に生息するが暑さにも弱く、活動しやすい気温二十数度の場所を求めて夏は涼しいところに北上し、冬は南西諸島や台湾付近まで南下する。

高原植物のヨツバヒヨドリやアザミ、秋の七草のフジバカマなどといった植物を、鋭敏な嗅覚で見つけて吸蜜（きゅうみつ）しながら旅を続けるという。

チョウ類で長い距離の渡りをするのは、アサギマダラと北米大陸に生息するオオカバマダラの2種だけ。

栗田さんは毎夏、同スキー場で放蝶するが、10年には台湾まで約2000キロの旅をしたアサギマダラもいたという。【高橋和夫】